唐詩中の使動表現小考〈その一〉

名畑嘉則

はじめに

表題にいう「使動表現」とは、漢語（漢文）における語法の一つである「使動用法」、一般に「本来、使役の意味を持たない動詞、あるいは名詞や形容詞の動詞化による動詞が、そのままで使役の意味を担うことをいう[一]」と定義される語法を用いた表現を指している。

漢文における使役表現では、使役の意味を持つ「使・令・遣・教」等の動詞を用い、その後に使役の対象を表す語を置き、さらにその後に対象が行う（行わされる）動作行為を表す述語を置く形式をとるのが一般的である。この形式で「使役の対象」となる語は、使役動詞に対する目的語であると同時に、後の述語に対する主語の性格も兼ねているため「兼語」と呼ばれ、このような兼語を含む文の形式は「兼語式」と称される。

このような兼語式の文とは異なり、使動用法を用いる文では、文の構造は、一般の動詞が述語となる動詞述語文（中国語による用語では「叙述句」）と同一である。すなわち「主語＋述語＋目的語」の形式であるが、使動用法では、述語（謂語）の位置に入った動詞（または動詞性の語）が目的語（賓語）に対してその動詞が表す動作行為をさせる意味（使役の意味）になるのである。通常の動詞述語文における述語が主語の動作行為を叙述するのに対して、使動用法の文では、述語は目的語が行わされる動作行為を叙述するわけであり、この点で特異な語法であると言える[二]。説明だけではわかりにくいので、幾つか実際の例文と訳を挙げてみよう（該当の動詞に○、目的語に●を付し、訳文の該当箇所に傍線を付す。例文はいずれも『史記』より）。

李斯因説秦王、請先取韓以恐他国。（秦始皇本紀）　李斯はそこで秦王に説いて、まず韓を攻め取って他国を恐れさせるよう請うた。

項王東撃破之、走彭越。（項羽本紀）　項王は東に進んでこれを破り、彭越を敗走させた。

項伯殺人、臣活之。（同右）　項伯が人を殺したが、私は彼（項伯）を生かして（かくまって）やった。

且王之所求者、闘晋楚也。（越王句践世家）　王が求めているのは、晋と楚を戦わせることだ。

坐之堂下、賜僕妾之食。（張儀列伝）（蘇秦は）彼（張儀）を堂の下に座らせ、召使いと同じ食事を与えた。

陳人使婦人飲之醇酒。（宋微子世家）陳国の人は婦人に彼（南宮万）によい酒を飲ませさせた。

歴史的な展開という面から言えば、先秦の文献では使動用法が広く用いられていたが、漢代以降になると徐々に廃れ、それに代わって兼語式の使役文が一般的になって行く、とされる。しかし、後代においても使動表現は消滅するわけではなく、現代語に至るまで様々な変容を生じながらも残存している。中でも、詩の表現においては、定型表現の中で使用できる語数の制約もあってか、一般の散文に比べて使動用法が活用される場合が多く見受けられるようにも思われる。本稿では、特に唐詩における使動用法を用いた表現に関して、筆者の気付いたところを報告してみたい。まず〈その一〉においては、いわゆる「V殺」語法を取り上げ、使動用法との関わりという面から論じてみることとする。

一　「V殺」語法とは

「V殺」語法とは、動詞の後に「殺」字を加えて「強調」を表す語法を指す(三)。この用法における「殺」は、辞書に「きわめて。はなはだ。《動詞や形容詞の後に補語として置き、程度が極端であることを表す》(四)」と解説されるように、品詞としては副詞、文成分としては補語に区分され、強調の機能を果たすものとされている。現在見られるこの語法の最も古い時期の用例は、次に掲げるような、古詩中に見られる「愁殺」の語形で、年代としては漢代に遡るものと推定されている。

去者日以疏、生者日以親。出郭門直視、但見丘與墳。古墓犂為田、松柏摧為薪。白楊多悲風、蕭蕭愁殺人。思還故里閭、欲帰道無因。（『文選』巻二十九「古詩十九首其十四」）

芳樹日月、君乱如於風。芳樹不上無心温而鵠、三而為行。臨蘭池、心中懐我悵。心不可匡、目不可顧、妒人之子愁殺人。君有他心、楽不可禁。王将何似、如孫如魚乎。悲矣。（『楽府詩集』巻十六「芳樹」）

右の「古詩十九首」の第十四首は、「去る者は日々に疎し」の出典としても有名である。「愁殺」を含む聯は「白楊（はくよう）に吹きつのる冷たい風、蕭蕭（しょうしょう）と鳴る音は悲痛を誘う(五)」のように訳される。「芳樹」詩の方も意味はほぼ同様で、「愁殺人」の部分は、「人を愁殺せしむ」、もしくは「人を愁殺す」と読まれるが、いずれにしても「人を愁えさせる」と使役の意味に解釈される形、すなわち使動用法の形である。

許山秀樹氏はこれらの漢代の用例、およびその後の六朝～唐代の用例を踏まえた上で、「V殺」語法の原型とその展開の問題について、以下の四点を指摘している(六)。

①強調用法の「殺」には、「殺 sha（入）」と、「殺 shai（去）」

とがある。「殺shai（去）」は、「甚」とはほぼ同じ働きを持つが、「殺sha（入）」は、必ず「V殺」という形で用いられる。

②「V殺」の初出は、漢代である。そして、その時用いられた「愁殺」は、この語法の最多種となり、多くの詩人に用いられた。

③「V殺」の語法は、大きくわけて、「非人間主格－使役」型と「人間主格－非使役」型とにわけられ、前者の原種は「愁殺」、後者の原種は「笑殺」である。

④「非人間主格－使役」型の動詞には、共通した特徴があり、マイナスイメージを持ったものが多い。一方、「人間主格－非使役」型の動詞には、特に目立った特徴は見られない。

これらの指摘は、氏の引用する具体的作品中の用例に基づくものであり、特に反論を加えるべき性格のものではないであろう。また、たとえば、「非人間主格－使役」型と「人間主格－非使役」型に大別されるとの指摘なども、それは「V殺」語法の原型についての指摘であって、この二区分が通時的に厳守され続けたわけではなく、後には「非人間主格－非使役」型や「人間主格－使役」型なども入り混じって使用されたことは、氏も指摘する通りである。

本稿でもとりあえずこれらを考察の基本的前提として共有しておくこととしたいが、本稿はさらに「使動用法」という、やや角度を変えた観点から「V殺」表現について考えてみようとするものである。

二　唐詩における「V殺」語法と使動用法

本稿では、「V殺」語法が、唐代に盛行した詩の表現の中でどのように用いられているのか、その用例の実態に考察の範囲を絞ることとする。

唐詩における用例を調査するに当たり、調査の便を考慮して『全唐詩』を基本資料とした。近年ではWeb上での用例検索の機能を具えた『全唐詩』のデータベースが数種類公開されているが、本稿ではこのうち、羅鳳珠氏の創設に係るWebサイト「網路展書読」内の「新詩改罷自長吟－全唐詩検索系統」を利用させていただいた。ここに記して感謝申し上げる。

さて、同サイトで検索すると、左の表のようなデータが得られる(七)。

「殺」字の用例総数	577
「V殺」の用例総数	184
上記のうち「愁殺」	90
「笑殺」	22
「羞殺」	11
「悩殺」	7
「狂殺」	6
「思殺」	5
「酔殺」	4
「驚殺」	3
「愛殺」「泥殺」「消殺」「賺殺」「纏殺」「凍殺」「断殺」「妒殺」「哭殺」	各2
「羨殺」「渇殺」「間殺」「弄殺」「楽殺」「吹殺」「歓殺」「唱殺」「餓殺」「凍餓殺」「枉殺」「詠殺」「怖殺」「熱殺」「啼殺」「熏殺」「喝殺」「搔殺」	各1

やはり「愁殺」の用例が最多で、九〇首の詩で用いられている。筆者の見るところ、この九〇例のうちで使動用法と認定できるものは八五例である。その他の五例は「愁殺」が句末に置かれたり意味上の切れ目に置かれたりしていて、後に目的語を伴わない形になっている。ただし、これらの例でも、①呉融「杏花」には「春物競相妒，杏花応最嬌。紅軽欲愁殺，粉薄似啼銷」とあり、目的語が明示されないため使動用法としては不完全な形ではあるが、杏花が作者を物悲しくさせているのだと解釈できる。これに対して、②趙嘏「寄前黄州竇使君」の「池上笙歌寂不聞、楼中愁殺碧虚雲」、③薛能「晩春」の「澄明煙水孤城立、狼藉風花落日眠。頼指清和桜筍熟、不然愁殺暮春天」、④羅隠「送宣武徐巡官」の「臨行不惜刀圭便、愁殺長安買笑銭」、⑤晁采「子夜歌十八首其四」の「顰眉臘月露、愁殺未成霜」の例では、作者（詩中の人物）が主語であるように受け取れ、「愁殺」は彼らが「ひどく物悲しくなる」ことを表す一般的な動詞として機能しているものと解される（これらの詩句の解釈については後述）。このように、幾らかの例外はあるものの、「愁殺」については使動用法で用いられる例が圧倒的多数を占めることが確認できる。

その他、三個以上の用例のある語のうち、使動用法の用例のみのものとしては、「悩殺」「狂殺」「思殺」「驚殺」があり、また「羞殺」は使動用法の例以外に目的語を伴わない一般動詞用法が一例のみで、これも使動用法を中心とするものと見てよいであろう。その他、用例は少ないが、「泥殺」「凍殺」「哭殺」「渇殺」「間殺」「弄殺」「歓殺」「凍餓殺」「怖殺」「熱殺」「啼殺」も使動用法の例のみである。

これらに対して、目的語を伴う一般動詞用法の用例をもつ語としては、「笑殺」の他に、「愛殺」「消殺」「賺殺」「纏殺」「断殺」「羨殺」「弄殺」「吹殺」「唱殺」「枉殺」「詠殺」「熏殺」「喝殺」「搔殺」がある。なお、このうち目的語を伴わない例をももつのは「笑殺」「愛殺」「纏殺」であり、さらに「笑殺」には使動用法の例もある。

三　「V殺」語法と自動詞・他動詞の別

さて、以上の用例分類を踏まえて言えることとして、目的語を伴う一般動詞用法の用例をもつ「V殺」型の語の「V」に当たる動詞は目的語をとる他動詞（及物動詞）の用法をもつものばかりである、という点が挙げられる。これは当然のこととも言えよう。ただし、これらの一般的他動詞の用例をもつ「V殺」型の語にも、目的語を取らない例が見られるが、それは、これらの語も必ずしも常に他動詞としてのみ用いられるわけではないからだと考えられる。

「笑殺」を例として考えてみよう。

①醜女来效顰，還家驚四鄰。寿陵失本歩，笑殺邯鄲人。（李白「古風五十九首其三十五」）

②且酔習家池，莫看墮涙碑。山公欲上馬，笑殺襄陽児。（李白「襄

陽曲四首其四」）

③襄陽小児斉拍手，攔街争唱白銅鞮。傍人借問笑何事，笑殺山翁醉似泥。（李白「襄陽歌」）

④交親尽在青雲上，郷国遥抛白日辺。若報生涯応笑殺、結茅栽芋種畬田。（白居易「夜宿江浦聞元八改官因寄此什」）

右の①と②は使動用法の例、③は目的語を伴う一般動詞用法、④は目的語を伴わない一般動詞用法の例である。「笑」の場合、「～をわらう（あざける）」という他動詞にもなるし、表情もしくは感情表出行動として「えみをうかべる」「声を出してわらう」という自動詞にもなる。②と③とはほぼ同様の状況を主語を変えて詠ったものだが、②は「酔っぱらった山公が馬に乗ろうとして、襄陽の子供たちを大笑いさせる」の意で、③は「（襄陽の子供たちは）山翁が泥のように酔っぱらったさまを大笑いしている」の意となる。晋代に襄陽の長官を勤めた山簡（竹林の七賢の一人・山濤の子）の逸話(八)を下敷きにしたものだが、これらの詩における「笑殺」は、②では自動詞の使動用法、③では他動詞として機能していると言えるだろう。①は「醜女が（西施の）ひそみに倣って四隣をぎょっとさせ、寿陵の餘子が趙の都の邯鄲に礼法を習いに行ったが逆に本来の歩き方を忘れて腹ばいで歩き人々を笑わせた(九)」と解され、第二句の「驚」と対応関係にあることからも、「笑殺」が自動詞の使動用法であることははっきりする。④は「もし今の私の暮らしぶりを青雲の上に時めく諸友に知らせたならばきっと笑うであろう、茅を結んで屋根をふき田を開墾し芋を植えて暮らしているのだから」といった意味になり、ここでは「笑殺」は自動詞の一般動詞用法と解せる。

ここで前節で挙げた、もっぱら使動用法で用いられる「愁殺」以外の「V殺」の用例をふり返ってみよう。「悩殺」「狂殺」「思殺」「驚殺」「羞殺」「醉殺」「泥殺」「凍殺」「哭殺」「渇殺」「間殺」「弄殺」「歓殺」「凍餓殺」「怖殺」「熱殺」「啼殺」がそれであるが、一見してわかる通り、これらの「V」に当たる語は、自動詞として、目的語をとらずに用いるのが一般的なものがほとんどである。

これらについて、幾つか例を挙げてみよう。

⑤柳色偏濃九華殿，鶯声酔殺五陵児。（李頎「送康洽入京進楽府歌」）(一〇)

⑥江月光於水，高楼思殺人。（杜甫「江月」）

⑦羅襪凌波生綱塵，那能得計訪情親。千杯緑酒何辞酔，一面紅妝悩殺人。（李白「贈段七娘」）

⑧落花惹断遊空糸，高楼不掩許声出，羞殺百舌黄鶯児。（顧況「鄭女弾筝歌」）

⑨才子風流詠暁霞，倚楼吟住日初斜。驚殺東鄰繡床女，錯将黄暈圧檀花。（杜牧「偶作」）

いずれも、一般的語法に従えは、「鶯の声によって長安の若者がうっとりする」「高楼からの眺めによって詩人が物思いに沈む」「美女が化粧を凝らしたさまによって人が夢中になる」「美しい箏

の音色によって黄鶯が恥じ入る」「風流才子の吟詠によって隣家の娘がどきっとする」のように主述関係を構成するはずのところを、主客を転換して使動表現に仕立て、「鶯の声が長安の若者をうっとりさせる」「高楼からの眺めが詩人を物思いに沈ませる」「美女が化粧を凝らしたさまが人を夢中にさせる」「美しい箏の音色が黄鶯を恥じ入らせる」「風流才子の吟詠が隣家の娘をどきっとさせる」と、それぞれの情動を引き起こす原因となった事物を主語に据えることにより、その印象をより一層強めようとしたものと見られる。

以上の例から推測するに、詩における使動用法を用いた表現、すなわち使動表現とは、使動の主体となる事物・人物に、他者に否応なくそのような情動を起こさせるだけの魅力や衝迫力があるということを強調的に表現する手法なのだと考えられる。そして、自動詞に「殺」を添加して「V殺」語形をとるときに、ほとんどの場合において使動用法で用いられているということを考えるならば、「殺」字を自動詞に添加することには、その自動詞がここでは使動用法で用いられている、ということを明示する一種の目印（標識語）としての機能があったと見なせるのではないだろうか。

四　自動詞「V殺」語法の一般動詞用法

自動詞の「V殺」語法における例外的な一般動詞用法についても検討しておこう。この用例に属するものには、第二節で挙げた趙嘏・薛能・羅隠・晁采の「愁殺」の例の他に、以下のような例がある。

①君王雖愛蛾眉好，無奈宮中妒殺人。（李白「玉壺吟」）

②劇却君山好，平鋪湘水流。巴陵無限酒，醉殺洞庭秋。（李白「陪侍郎叔遊洞庭醉後三首其三」）

③能向鮫綃四幅中，丹青暗与春争工。勾芒若見応羞殺，暈緑匀紅漸分別。（裴諧「観修処士画桃花図歌」）

④成都滞遊地，酒客須醉殺。（張祜「送蜀客」）

①は「宮中の妬みを懐く人々はどうしようもない」で、「妒殺」が連体修飾語になっている例。なお、②の詩は、ここに挙げてはおいたが、第二節に挙げた呉融の詩と同様に、目的語を欠いた使動用法の例とも解しうる（「洞庭湖の秋の湖水が、巴陵の無限の酒となって〔私を〕ひどく酔わせる」という解釈（一一））。

右の例を見るに、李白の詩を除けば、いずれも唐の後期から末期にかけての詩人による用例であるという点がまず目につく。晁采は大暦期（七六六～七七九年）の人、張祜は元和・長慶（八〇六～八二四）頃の人（一二）、趙嘏は会昌四年（八四四）の進士（一三）、薛能は会昌六年の進士（一四）、呉融は龍紀元年（八八九）の進士（一五）、羅隠は乾符（八七四～八七九）頃の人（一六）、裴諧は兄の説が天祐三年（九〇六）の進士（一七）だとされる。伝説上の人物ともいうべき晁采を除けば（一八）、いずれも中唐以後の人びとなのである。す

なわち、この用法は比較的後発のものであろうとの推測が可能である。

③は修処士が描いた絵について、そこに巧みに表現された春の情景を「勾芒（春の神）（一九）が見たら恥じ入るだろう」とするもの。④は「成都という行楽の適地では、酒好きたるものすべからく酔っぱらうべきである」と詠うもの。いずれも主語は「勾芒」「酒客」で、これが動作行為（「恥じ入る」「酔っぱらう」）の主体である。

第二節で挙げた「愁殺」の例についても見ておくと、まず①呉融「杏花」詩は「春の風物が妍を競う中で、杏の花が最も艶やかである。紅の軽い花びらは物悲しさを催させ、花粉が散ったさまは涙が消えた痕のようである」のように解せるか。この詩では「愁殺」の主語は「杏花」で、これが作者に愁いを生じさせるのだから、これは目的語を略した使動用法の変種と考えられる。一方、②趙嘏「寄前黄州竇使君」詩は「池のほとりで奏でられていた笙歌も静まり返り、楼中で虚空の雲に対して愁いに沈む」、③薛能「晩春」詩は「霞のかかる澄んだ川の岸辺に孤城がそびえ、花が風に散り舞う中を日が落ちる。ちょうど晩春の桜と筍の熟したのがあるのが幸い、さもなくば暮春の空に愁いに沈んでいたことだろう」、④羅隠「送宣武徐巡官」詩は「出発に当たって薬の調達に金は惜しまないが、長安での妓女遊びの銭が心配だ」、⑤晁采「子夜歌十八首其四」詩は「十二月の露に眉をしかめ、愁いに沈んでもまだ霜にはならない」のように解せる。これらはいずれも作者（もしくは詩中に詠われた人物）が主語で、彼らが愁いを懐くことを述べる、一般的自動詞の用法である。

自動詞「V殺」語法の一般動詞用法は、李白の先駆的な表現に触発され、また、「殺」字の、使動用法の標識語としての機能に対する意識が薄れるとともに（二〇）、唐後期以後にこれを採用する詩人が出現し始めたものと理解してよいだろう。

五　「V殺」語法の展開

さて、本稿冒頭で触れたように、使動用法という語法では、動詞以外にも、名詞や形容詞が動詞化したものも使役の意味を伴って用いられることがある。ただし、これらの場合、単純な他動詞との区別がしにくい面もある。とりあえず形容詞の例だけを挙げよう。

君子正其衣冠。（『論語』堯曰）　君子が自分の衣服や冠をきちんと整える。

君子遠庖廚。（『孟子』梁恵王上）　君子は調理場から遠ざかる。

欲富国者務広其地。（『史記』張儀列伝）　国を富ませようとする者は、土地を広くするように努める。

媼尊長安君之位。（『戦国策』趙策）　太后は長安君の地位を高くした。

「正」「遠」などは、漢和辞典でも特に形容詞の動詞化したもの

だと断ることなく、「ただす」「とおざける」などの動詞としての意味、用法を載せているだろう。漢語にはもともと品詞という概念はないから、後代の西洋式文法の知識を具えた目から使動用法とされる事象を見たときに品詞の転換もしくは活用と見えてしまう、というのが実態に近いのであろうが、中国の文法書ではこれらを使動用法として解説するものが多い。いずれにしても、「正しくする」「遠くする」のように、形容詞としての意味を保持しつつ、対象をその形容詞が表す状態にさせるという使役の意味を含んだ動詞として用いるものである。

では、唐詩における「V殺」語法の例ではどうだろうか。

①浅色穀衫軽似霧，紡花紗褲薄於雲。莫嫌軽薄但知著，猶恐通州熱殺君。（白居易「寄生衣与微之因題封上」）

②南州無百戦，北地有長征。間殺何従事，傷哉蘇子卿。…（斉己「寄答武陵幕中何支使二首其二」）

①は「熱」（暑い）、②は「間」（暇だ）という形容詞が「V殺」語法に組み込まれた形である。①は「きっと通州（今の四川省達州市）の気候が君を暑がらせることだろう」、②は「（戦のない任地の情勢が）あなた（何従事）を暇がらせることだろう」のように訳せるだろう。どちらも使動用法と見なして差し支えない。これを先ほど挙げた形容詞の使動用法の例文と比べてみると、幾つかの違いに気づく。まずは「暑がらせる」のように、対象に「～と感じさせる」という、対象の感覚や意識の要素が加わっている点、次いで主語が非人間であるという点である。

漢語文法において使動用法と並んで「品詞の活用」の一種とされる語法に、「意動用法」というものがある。辞書の説明を引けば、「名詞あるいは形容詞は動詞化することで、目的語に対して『～と思う』『～と見なす』という主観的な判断を表す。(二)」となる。これも形容詞の例を挙げると次の通り。

項梁然其言。（『史記』項羽本紀）　項梁はその言葉を正しいと思った。

孔子賢之。（『孟子』離婁下）　孔子は彼を賢いと見なした。

これを踏まえて先ほどの①②の「V殺」語法を見直してみれば、それらが単なる使動用法ではなく、意動用法の要素を含むもののように感じられないだろうか。単なる使動用法であれば、訳は「君を熱い状態にする（熱する）」「あなたを暇な状態にする」となるはずなのである。このような形容詞を用いた「V殺」型の使動表現が、「愁殺」等の、対象に情動を呼び起こす表現から派生したものであることは間違いないであろう。そうすると、これらは、形容詞が意動用法により動詞化した、「～と感じる」「～と思う」という情動的な意味合いを含み込んだ語を、さらに「V殺」型にすることで使動用法として活用させた表現と見なしうるのではなかろうか。形容詞型「V殺」の使動用法で非人間を主語としているのも、「V殺」の使動用法の原型に沿ったためであると考えられる。

このような形容詞に由来する「V殺」型の使動表現は、後の時代になるとさらに展開して次のような用例を生み出す。

③江州双酎到籬東、快殺陶家寂寞翁。（北宋・呂南公「答道先寄酒柴荆」）

④春夢都無三日好，一冬忙殺探梅人。（南宋・范成大「連夕大風、凌寒梅已零落殆尽三絶」）

⑤玉花小朶是山巒，香殺行人只欲顛。（南宋・楊万里「万安出郭早行」）

⑥月輪半仄吾未睡，楼角風生涼殺人。（同右「七月十二日夜登清心閣醉吟」）

⑦只因未遇程夫子，苦殺当年多少人。（明・胡居仁「嘆古人読書二首其二」）

「快殺＝喜ばせる」「忙殺＝忙しくさせる」「香殺＝香りにむせ返らせる」「涼殺＝涼しがらせる」「苦殺＝苦しめる」、これらはいずれも「熱殺」の延長線上にある表現、すなわち、対象の意識の上に形容詞が表す状態をもたらすことを意味する表現だと言えよう。「忙殺」は現代の日本語でも現役で用いられる言葉であるが、これなどはまさに「間殺」と対をなす表現である。

右のような使動用法の例とは別に、使動型をとらない形容詞由来の「V殺」語法の用例もある。まずは唐代の例を挙げる。

⑧江東風光不借人，枉殺落花空自春。（李白「醉後贈従甥高鎮」）

「枉」は「まげる、ゆがめる」意の他動詞としても用いられる語だが、「枉殺」と熟する場合の意味は、辞書に副詞の用法として「むなしく、むだに」と解説されるものが該当する。これが「V殺」語型になることで「むだにする、浪費する」の意味となることは、辞書にも登録されている通りである(二二)。⑧の詩句を解すれば、「（金はなくとも）江南の風景は人に借りることもない。惜しげもなく花を散らせ見る人もないままただ春景色が広がっている」といった意味になろうか。副詞に「殺」を加えて「V殺」語型とし、目的語をとる一般動詞用法に転用した例と言えるが(二三)、ここでも李白が新たな表現の先駆となっていることは興味深い。

この一般動詞用法の例にもまた後世の展開が見られる。

⑨不因豊歳人情楽，淡殺溪頭老病人。（南宋・陸游「村居即事三首其三」）

⑩峰頭寺寺楼楼月，清殺東坡錦繡腸。（南宋・楊万里「恵州豊湖亦名西湖二首其一」）

⑪道是樊川軽薄殺，猶将万戸比千詩。（同右「寄陸務観」）

⑫窮州今夕酸寒殺，老眼看来自不忺。（同右「郡中上元燈減旧例三之二而又迎送使客七首其三」）

⑬垂楊幸自風流殺，莫著啼烏只著鸚。（同右「春望二首其二」）

「淡殺」は「冷淡にする」、「清殺」は「清浄に洗いきよめる」で、いずれも他動詞的用法と見なせる。⑪以下は「V殺」型とはもはや呼び難い。これらは「軽薄殺＝軽薄なること甚だしい」「酸寒殺＝貧困なること甚だしい」「風流殺＝至って風流だ」といった意味

となるもので、むしろ形容詞の強調表現と理解した方がよさそうである。宋代、とりわけ南宋の時代となると、このように、かなり自由に語尾に「殺」を付した表現が生み出されているのである(二四)。

結語

本稿では、唐詩における「V殺」語法と使動用法の関わりについて考察し、その中で以下のような論点を提示した。

(1)「V殺」語法の原型とされる「愁殺」をはじめとして、「悩殺」「狂殺」「思殺」「驚殺」「羞殺」「酔殺」などの、自動詞に「殺」を付した「V殺」型の語は、もっぱら使動用法で用いられる。

(2)自動詞に「殺」を付した「V殺」型の語において、「殺」字は、使動用法であることを明示する標識語として機能していた可能性がある。

(3)「笑殺」を原型として展開した、他動詞に「殺」を付した「V殺」型の語は、目的語を伴う一般的他動詞の用法でも用いられる。

(4)「笑」を含む他動詞用法と自動詞用法を併せもつ動詞による「V殺」型の語では、一般的自動詞の用法や使動用法で用いられる場合もある。

(5)唐代後期以後、「殺」字の、使動用法の標識語としての機能に対する意識が薄れるにつれて、自動詞由来の「V殺」型の語が一般的自動詞の用法でも用いられるようになる。

(6)形容詞由来の「V殺」型の語は、単純な使動用法ではなく、意動用法の性格をも併せもった複合的な用法で用いられる。

(7)形容詞由来の「V殺」型の語は、宋代以降、多くの使動用法の変種を生み出す。

(8)李白の「枉殺」という表現は、宋代以降における形容詞由来の「V殺」型の語の一般的他動詞用法の先駆けとなった。

(9)「形容詞＋殺」型の語には、宋代以降、形容詞の強調表現としての用法も出現した。

なお、最後に付言すると、許山論文（一九九三）では、「V殺」の使動用法においては「V」に入る語に「マイナスイメージを持ったものが多い」との指摘があったが、私見を述べれば、これは「殺」という字との親和性の問題によるもののように思われる。補語としての「殺」には「ころす」という原義との関係はないとされるが(二五)、やはりイメージとしてのつながりが皆無とは言えないだろう。従って、殺は強調の副詞だと言っても、単なる強調には止まらず、「手ひどく～する」「～してひどい目にあわす」といった語感を伴うように感じられる。使動用法の場合、「V殺」が働く対象は動作行為（情動）の主体であるから、彼は必然的に、呼び起こされる情動によって「ひどい目にあう」ことにならざるを得ない。かくして、「V」にはマイナスイメージの語がもっぱら使用されることになるのではなかろうか。

【注】

（一）『全訳漢辞海』第四版（戸川芳郎監修、佐藤進・濱口富士雄編、三省堂、二〇一七年）付録「漢文読解の基礎」10．品詞の活用〈3〉使動用法の項より。

（二）漢語における使動用法について論じた先行研究としては、馬建忠『馬氏文通』（一八九八年）、陳承沢『国文法草創』（一九二二年）以来の歴代の中国語文法書に言及があるほか、比較的近年の専論として、中国語のものでは、楊鳳清「談談使動句」（西北師院学報（社会科学）一九八二年一期）、唐培良「使動用法与使令兼語式」（上海師範学院学報（社会科学版）一九八三年三期）、劉又辛「使動、意動説商榷」（西南師範学院学報（哲学社会科学）一九八三年二期）、李佐豊「先秦漢語的自動詞及其使動用法」（語言学論叢一〇輯、一九八三年）、李心純「古漢語動詞使動用法管窺」（山西師院学報（社会科学）一九八四年四期）、徐世英「古漢語中的使動、意動説」（天津師大学報（社会科学版）一九八六年一期）、王建「関於使動用法、意動用法的反思」（中国語文研究第一〇期、一九九二年）、楊尚貴「名詞使動用法的両種類型及成因」（山西大学学報（哲学社会科学版）一七巻三期、一九九四年）、同「古漢語形容詞在使動、意動時活用的程度及原因」（山西師大学報（社会科学版）二二巻一期、一九九五年）、方文一「〝欲〟、〝能〟的使動用法格式」（古漢語研究 一九九五年三期）、劉婉「使動、意動用法辨析」（古漢語研究一九九六年一期）、白硯「浅析心態動詞的使動用法」（河南大学学報（社会科学版）三八巻六期、一九九八年）、蔣紹愚「内動、外動和使動」（語言学論叢 二三輯、二〇〇一年）、宋亜云「从《左伝》的〝見〟〝聞〟〝伐〟看上古漢語的使動構詞和被動構詞」（語言学論叢三二輯、二〇〇六年）、肖賢彬「〝使動用法〟中〝使動詞〟的性質問題」（北京師範大学学報（社会科学版）二〇〇八年一期）などがある（現代中国語のみを論じたものは除く）。また、日本語による論考としては、山根真太郎「古代漢語特殊語法研究（2）―「使動用法」について」（中国中世文学研究二六号、一九九四年）、小方伴子「『論衡』の使動用法」（中国語学二四五号、一九九八年）、同「先秦・両漢の使動用法と使令兼語式」（中国語学二四九号、二〇〇二年）、石村広「「使動用法」再考―陳承澤の「活用」説をめぐって」（中国文化七二号、二〇一四年）などがある。

（三）「V殺」語法という用語は、次に掲げる許山秀樹氏の一連の論考から借りたものである。「「V殺」の成立と展開 ―漢から唐末までの詩を中心に―」（中国詩文論叢一二、一九九三年）、「口語系資料における「V殺」の諸相―『遊仙窟』・『敦煌變文集』・『祖堂集』・『朱子語類』の用例から―」（中国詩

文論叢 一三、一九九四年）、「古典詩における「V将」―「V殺」との比較を中心に」（中国詩文論叢 一四、一九九五年）。

（四） 注（一）所掲書一七〇六頁。

（五） 『新編中国名詩選・上』（河合康三編訳、岩波文庫、二〇一五年）の訳による。

（六） 注（三）所掲許山論文（一九九三）。

（七） 該サイトの検索システムで「詩文」の項目にそれぞれの文字列を入力して検索した。同システムでは『全唐詩』本文に付された注釈・校語中の用例も含めて、用例が一首単位で検索される。表の「殺」字の用例総数欄の五七七の数値は、検索結果の総数五九〇首から注釈・校語のみに出現する例一三首を除いた数値である（以下の数値も同様）。なお、「枉殺」などのように、「殺」字を実字として動詞に解すべき用例（「不当に殺す」）が混在している場合はそれを除いて数えた。なお、「V殺」型の語の用例一覧表を本稿末尾に掲げておく。

（八） 山簡の逸話については、『晋書』山簡伝、『世説新語』任誕篇など。なお、山簡の故事と李白の「襄陽歌」の関係について、詳しくは戸崎哲彦「山簡の故事と李白「襄陽歌」―東晋・習鑿歯『襄陽耆旧記』の復元」（滋賀大学経済学部研究年報五号、一九九八年）を参照。

（九） 『荘子』秋水篇に見える寓話。

（一〇） 「酔殺」は、たまたま『全唐詩』における用例が使動用法、一般的自動詞用法ともに二例ずつであるため、もっぱら使動用法で用いる語を列挙した中に含めていないが、「酔」は自動詞であり、本質的には使動用法で用いるはずの語であると見られる。

（一一） 郁賢皓『李白選集（中国古典文学名家選集）』（上海古籍出版社、一九九〇年）の解釈を参考にした。

（一二） 『唐才子伝』巻六、張祜伝に「元和、長慶間、深為令狐文公器許。」とある。

（一三） 『唐才子伝』巻七、趙嘏伝に「会昌四年鄭言榜進士。」とある。

（一四） 『唐才子伝』巻七、薛能伝に「会昌六年狄慎思榜登第。」とある。

（一五） 『唐才子伝』巻九、呉融伝に「龍紀元年李瀚榜及進士第。」とある。

（一六） 『唐才子伝』巻九、羅隠伝に「乾符初挙進士、累不第。」とある。

（一七） 『唐才子伝』巻十、裴説伝に「天祐三年礼部侍郎薛廷珪下状元及第。……弟諧亦以詩名世。」とある。

（一八） 明・馮夢龍『情史類略』第三巻情私類に「大暦中、有晁采者、小字試鶯、女子中之有文者也。」とある。

（一九） 『呂氏春秋』孟春紀に「孟春之月、日在営室、昏参中、旦尾中。其日甲乙。其帝太皞。其神句芒。」とある。

（二〇）　注（三）所掲許山論文（一九九三）にも、「…「使役」型のグループと「非使役」型のグループとは、それぞれ異なる原種を持った別種の語法、と考えられよう。そして時代が下るとともに、二つの「V殺」型が影響を及ぼしあい、少しずつ他の特徴をとり入れて混種が進んでいった、というところが最も実態に近いであろう。」と述べる。

（二一）　注（一）所掲書一七〇七頁。

（二二）　たとえば『漢語大詞典』（漢語大詞典出版社、一九八六年）の「枉殺」の項（五八六三頁）には語義の第二として「白費，辜負。殺，極甚之義。」と解説される。ちなみに第一の語義は「無罪而乱加殺害。」

（二三）　この場合の「枉殺」は、意動用法の要素を含まない使動用法である、とも言えるかもしれない。ただし、前述の通り、形容詞の使動用法は他動詞と区別することが本質的に困難である。

（二四）　宋代の口語文献における「V殺」語法の使用実態については、注（三）所掲許山論文（一九九四）の『朱子語類』に関する記述を参照。

（二五）　たとえば、『古代漢語虚詞詞典』（中国科学院語言研究所古代漢語研究室編、商務印書館、一九九九年）の「殺」の項には、「《説文》：〝殺，戮也。〟虚詞与本義無関，而是仮借字。」とある。

『全唐詩』における「V殺」語法の用例一覧

番号	作者名	作　品　名	用例を含む句
1	楊炯	戰城南	悲風**愁殺**人。
2	宋之問	始安秋日	分明**愁殺**人。
3	郭震	蛩	**愁殺**離家未達人，
4	徐延壽	折楊柳	**愁殺**隴頭人。
5	李頎	送康洽入京進樂府歌	鶯聲**醉殺**五陵兒。
6	李頎	別梁鍠	五湖三江**愁殺**人。
7	常建	古意【案：一本連後〈古意〉三首，共作四首。】	蕭條**愁殺**人，
8	常建	送宇文六	**愁殺**江南離別情。
9	萬楚	五日觀妓	紅裙**妒殺**石榴花。
10	孟浩然	揚子津望京口	**愁殺**渡頭人。
11	孟浩然	涼州詞，二首之二	**思殺**邊城游俠兒。
12	李白	古風，五十九首之三十五	**笑殺**邯鄲人。
13	李白	襄陽曲，四首之四	**愁殺**襄陽兒。
14	李白	淥水曲	**愁殺**蕩舟人。
15	李白	猛虎行【案：此詩蕭士贇云是偽作。】	楊花茫茫**愁殺**人。
16	李白	襄陽歌	**笑殺**山翁醉似泥。
17	李白	玉壺吟	無奈宮中**妒殺**人。
18	李白	横江詞，六首之三	狂風**愁殺**峭帆人。

19	李白	横江詞，六首之三	狂風**愁殺**峭帆人。
20	李白	當塗趙炎少府粉圖山水歌	武陵桃花**笑殺**人。
21	李白	醉後贈從甥高鎮	**枉殺**落花空自春。
22	李白	寄韋南陵冰，余江上乘興訪之，遇尋顏尚書笑有此贈	春風**狂殺**人，
23	李白	魯郡堯祠送竇明府薄華還西京【案：時久病初起作。】	堯祠**笑殺**五湖水，
24	李白	答裴侍御先行至石頭驛，以書見招期月滿泛洞庭	**狂殺**王子猷。
25	李白	陪侍郎叔遊洞庭醉後，三首之三	**醉殺**洞庭秋。
26	李白	嘲王歷陽不肯飲酒	**笑殺**陶淵明，
27	李白	贈段七娘	一面紅妝**惱殺**人。
28	李白	初月	**愁殺**戰征兒。
29	劉灣	李陵別蘇武	窮陰**愁殺**人，
30	張謂	春園家宴	參差**笑殺**郢中兒。
31	岑參	胡笳歌送顏真卿使赴河隴	**愁殺**樓蘭征戍兒。
32	岑參	題苜蓿峰寄家人	不見沙場**愁殺**人。
33	岑參	秋夜聞笛	一夜**愁殺**湘南客。
34	樓穎	西施石	石上青苔**思殺**人。
35	高適	薊門行，五首之五	黃雲**愁殺**人。
36	高適	古大梁行	驅馬荒城**愁殺**人。
37	馮著	洛陽道	洛陽道上**愁殺**人。
38	杜甫	奉陪鄭駙馬韋曲，二首之一	家家**惱殺**人。
39	杜甫	遣懷	**啼殺**後棲鴉。
40	杜甫	奉送嚴公入朝十韻	**愁殺**錦城人。
41	杜甫	江月	高樓**思殺**人。
42	杜甫	南極	**愁殺**李將軍。
43	杜甫	月，三首之一	**愁殺**白頭人。
44	杜甫	雨晴	秋江**思殺**人。
45	杜甫	冬至	忽忽窮愁**泥殺**人。
46	杜甫	清明，二首之二	白蘋**愁殺**白頭翁。
47	賈至	巴陵寄李二戶部張十四禮部【案：時貶岳州同馬。】	**愁殺**江南獨愁客。
48	賈至	春思，二首之二	**醉殺**長安輕薄兒。
49	張侁	辭房相公	**愁殺**恓遑一布衣。
50	顧況	行路難，三首之三【案：本集只有前二首，〈英華〉第三首居前，合為一首。】	欲落不落**愁殺**人，
51	顧況	鄭女彈箏歌	**羞殺**百舌黃鶯兒。
52	顧況	別江南	**愁殺**遠行人。
53	戎昱	湖南雪中留別	何處**愁殺**人，
54	戴叔倫	敬酬陸山人，二首之一	出宰東陽**笑殺**君。
55	李益	登夏州城觀送行人賦得六州胡兒歌	古來**愁殺**漢昭君。
56	李益	汴河曲	風起楊花**愁殺**人。
57	李端	晦日同苗員外遊曲江	**愁殺**故鄉人。
58	王建	花褐裘	**消殺**秋風稱獵塵。
59	朱放	送魏校書	**愁殺**人行知不知。
60	韓愈	瀧吏【案：元和十四年出為潮州作。】	牙眼**怖殺**儂。
61	陳羽	若耶溪逢陸灃	**笑殺**雲間陸士龍。

62	劉禹錫	白鷹	**喝殺**三聲掠地來。
63	劉禹錫	再傷龐尹	**哭殺**畫眉人。
64	劉禹錫	楊柳枝詞，九首之三	**狂殺**長安年少兒。
65	盧仝	與馬異結交詩	此婢嬌饒**惱殺**人,
66	李賀	河南府試十二月樂詞【案：并閏月。】：三月	花城柳暗**愁殺**人。
67	元稹	酬樂天得微之詩知通州事因成，四首之二	此中**愁殺**須甘分,
68	元稹	和李校書新題樂府十二首：五弦彈	一聲**狂殺**長安少。
69	白居易	新樂府：七德舞。美撥亂，陳王業也。	李勣嗚咽**思殺**身。
70	白居易	新樂府：李夫人。鑒嬖惑也	不言不笑**愁殺**人。
71	白居易	新樂府：杏為梁。刺居處僭也	撫掌回頭**笑殺**君。
72	白居易	新樂府：隋堤柳。憫亡國也	老枝病葉**愁殺**人,
73	白居易	效陶潛體詩，十六首之十一	月明**愁殺**人,
74	白居易	秋江送客	煙波**愁殺**人。
75	白居易	宿溪翁【案：時初除郎官赴朝。】	虛言**笑殺**翁,
76	白居易	送張山人歸嵩陽	殘茶冷酒**愁殺**人。
77	白居易	山石榴寄元九	商山秦嶺**愁殺**君,
78	白居易	酬和元九東川路詩十二首：亞枝花【案：在翰林時作。】	**愁殺**多情驄馬郎。
79	白居易	酬和元九東川路詩十二首：江岸梨花【案：在翰林時作。】	一樹江頭**惱殺**君。
80	白居易	寄生衣與微之因題封上	猶恐通州**熱殺**君。
81	白居易	得微之到官後書，備知通州之事，悵然有感，因成四章，四首之二	已曾**愁殺**李尚書。
82	白居易	夜宿江浦聞元八改官因寄此什	若報生涯應**笑殺**,
83	白居易	竹枝詞，四首之二	**愁殺**江樓病使君。
84	白居易	醉題沈子明壁【案：在蘇州作。】	若聞亦應**愁殺**君。
85	白居易 白居易	崔侍御以孩子三日示其所生詩見示，因以二絕句和之，二首之二	**愁殺**無兒老鄧攸。
86	白居易	酬鄭侍御多雨春空過詩三十韻【案：次用本韻。】	**惱殺**踏青娘。
87	白居易	裴常侍以題薔薇架十八韻見示，因廣為三十韻以和之【案：重授賓客歸履到宅作。】	假如君**愛殺**,
88	白居易	種柳三詠，三首之三	**愁殺**閒遊客,
89	白居易	雨中聽琴者彈別鶴操	嗟歎悲啼**泥殺**君。
90	白居易	強起迎春戲寄思黯	**笑殺**平原樓上人。
91	白居易	過裴令公宅二絕句，二首之二【案：裴令公在日，常同聽楊柳枝歌，每遇雪天，無非招宴，二物如故，因成感情。】	**愁殺**鄒枚二老翁。
92	徐凝	除夜言懷兼贈張常侍【案：見《文苑英華》。】	**消殺**春愁付酒杯。
93	李涉	題開元寺牡丹	**羞殺**玫瑰不敢開。
94	殷堯藩	聽歌	直教**愁殺**滿城人。
95	施肩吾	新昌井	待得甘泉**渴殺**人。
96	姚合	望騎馬郎	**賺殺**唱歌樓上女,
97	張祜	病僧	茶煙**熏殺**竹,
98	張祜	送蜀客	酒客須**醉殺**。
99	李遠	楊花	**驚殺**綠窗紅粉人。
100	杜牧	黃陵廟詞【案：一作李羣玉詩。】	水遠山長**愁殺**人。
101	杜牧	汴河懷古【汴口懷古】	折柳孤吟**斷殺**腸。

102	杜牧	贈張祜	**羞殺**李將軍。
103	杜牧	登九峰樓	白頭**搔殺**倚柱遍,
104	杜牧	偶作	**驚殺**東鄰繡床女,
105	杜牧	新柳	**愁殺**朝朝暮暮人。
106	李商隱	題二首後重有戲贈任秀才	**羨殺**烏龍臥錦茵。
107	李商隱	亂石	**哭殺**廚頭阮步兵。
108	李商隱	贈荷花	翠減紅衰**愁殺**人。
109	李商隱	擬意【案：續新添詩。】	**唱殺**畔牢愁。
110	薛逢	醉春風	依舊野花**愁殺**人。
111	趙嘏	寄前黃州竇使君	樓中**愁殺**碧虛雲。
112	薛能	晚春	不然**愁殺**暮春天。
113	崔櫓	臨川見新柳	**愁殺**遠人人不知。
114	李群玉	黃陵廟【案：一作李遠詩。】	水遠山長**愁殺**人。
115	李群玉	春晚	芳草落花**愁殺**人。
116	賈島	望山	**愁殺**望山人。
117	李郢	陽羨春歌	溪頭鐃鼓狂殺儂,
118	李郢	燕蓊花	**愁殺**江南去住人。
119	崔玨	門前柳【案：第一句缺一字。】	風澹暖煙**愁殺**人。
120	陸龜蒙	早春	**愁殺**扈芳人。
121	司空圖	榜下	煙閣英雄**笑殺**人。
122	司空圖	與伏牛長老偈，二首之一	**凍殺**胡僧雪嶺西。
123	司空圖	楊柳枝壽杯詞，十八首之九	舞腰**羞殺**漢宮人。
124	來鵠	蠶婦	**凍殺**黃金屋裡人。
125	李山甫	柳，十首之七	一枝**愁殺**別離情。
126	羅鄴	槐花	**愁殺**江湖隨計者,
127	羅隱	浮雲【雲】	也曾**愁殺**楚襄王。
128	羅隱	送宣武徐巡官	**愁殺**長安買笑錢。
129	羅隱	送裴饒歸會稽	**笑殺**山陰雪中客,
130	羅隱	吳門晚泊寄句曲道友	**笑殺**雷平許遠遊。
131	羅虬	比紅兒詩，一百首之二十五	**羞殺**凡花盡不開。
132	羅虬	比紅兒詩，一百首之九十四	**羞殺**新豐謝阿蠻。
133	鄭谷	淮上與友人別	楊花**愁殺**渡江人。
134	韓偓	歸紫閣下	野藤纏**殺**鶴翹松。
135	吳融	杏花【案：五言三韻。】	紅輕欲**愁殺**,
136	吳融	子規	**愁殺**行人歸去船。
137	吳融	贈廣利大師歌	**詠殺**江南風與月。
138	杜荀鶴	贈廬嶽隱者	古樹藤纏**殺**,
139	杜荀鶴	八駿圖	綠耳驊騮**賺殺**人。
140	杜荀鶴	離家	槐柳路長**愁殺**我,
141	韋莊	柳谷道中作卻寄	馬上離情**斷殺**魂。
142	韋莊	咸通	**歡殺**金張許史家。
143	韋莊	令狐亭【案：集外補遺。】	管弦**吹殺**後庭花。
144	黃滔	喜翁文堯員外病起	**驚殺**漳濱鬼,
145	徐夤	依韻和尚書再贈牡丹花	**羞殺**千花百卉芳。

146	徐夤	和僕射二十四丈牡丹八韻	**羞殺**登牆女,
147	崔道融	峽路	夜長**愁殺**人。
148	裴諧	觀修處士畫桃花圖歌	勾芒若見應**羞殺**,
149	周曇	春秋戰國門：田文	**笑殺**臨淄士偶人。
150	張泌	芍藥	又應**愁殺**別離人。
151	陳陶	西川座上聽金五雲唱歌	水殿一聲**愁殺**人。
152	陳陶	續古，二十九首之五	**笑殺**王子喬,
153	陳陶	續古，二十九首之六	**愁殺**幾少年,
154	徐鉉	宣威苗將軍貶官後重經故宅	門前**愁殺**馬中郎。
155	徐鉉	贈浙西妓亞仙【案：筵上作。】	**惱殺**別家人。
156	徐仲雅	耕夫謠【農夫謠】	此輩總**餓殺**。
157	周濆	逢鄰女	參差**羞殺**白芙蓉。
158	織錦人	吟【案：《盧氏雜說》云：「盧氏子失第，徒步出都城，逆旅寒甚。有一人續至，附火吟云云。盧愕然，以為白樂天詩。問姓名，曰姓李，世織綾錦，前屬東都官錦坊，近以薄伎投本行。皆云：『以今花樣，與前不同，不謂伎倆。見以文彩求售者，不重於世如此。』且東歸去。」】	把此文章**笑殺**他。
159	無名氏	嘲舉子騎驢【案：咸通中，以進士車服僭差，不許乘馬。時場中不減千人，雖勢可熱手，亦皆騎驢，或嘲之云云。】	就中**愁殺**鄭昌圖,
160	皎然	九月十日	**愛殺**柴桑隱,
161	皎然	送至嚴山人歸山【送嚴上人】	**惱殺**禪僧未證心。
162	皎然	偶然，五首之四	**樂殺**金王孫。
163	鄭遨	思山詠【案：一作杜光庭詩。】	萬是千非**愁殺**人。
164	薛蘊	贈鄭女郎【鄭氏妹】	**愁殺**門前少年子。
165	晁采	子夜歌，十八首之四	**愁殺**未成霜。
166	張琰	春詞，二首之一	**愁殺**閨中婦。
167	寒山	詩，三百三首之四十六	松風**愁殺**人。
168	寒山	詩，三百三首之五十七	到頭凍**餓殺**。
169	歸仁	牡丹	算應**狂殺**五陵兒。
170	貫休	茫茫曲	茫茫四大**愁殺**人。
171	貫休	將入匡山別芳、晝二公【將入廬山別僧】，二首之二	世情世界**愁殺**人,
172	貫休	偶作因懷山中道侶	爭利爭名**愁殺**人。
173	齊己	江上值春雨	**愁殺**騷人路,
174	齊己	寄答武陵幕中何支使，二首之二	**閒殺**何從事,
175	齊己	和李書記	**羞殺**薔薇點碎叢。
176	杜光庭	思山詠【案：一作鄭遨詩。】	萬是千非**愁殺**人。
177	蜀宮群仙	后土夫人	**愁殺**韋郎一覺眠。
178	廣利王女	寄張無頗，二首之一【案：長慶中，進士張無頗遊番禺。有善易袁大娘者，與之玉龍膏一合，教其立標治疾，可獲名姝，無頗依教。果有黃衣將廣利王命，邀治貴主疾，出膏令吞之，立愈。貴主與之目成，辭歸月餘，遣青衣送紅牋詩二首。頃之，主有疾如初，王復召無頗治，因以女歸之，遣還人間，居韶陽。後恐人疑訝，去不知所適，無頗嘗詰妻。袁大娘何人，乃袁天綱女，程先生妻也。】	**愁殺**深宮落砌花。

179	無名鬼	詩，二首之一	指點檣竿**笑殺**儂。
180	李和風	題敬愛詩後【案:初聞為高塘館詩，軺軒往來，莫不吟諷，以為警絶。自和風題後，人更解頤。】	參差**笑殺**楚襄王。
181	裴諝	判誤書紙背【案：諝素好詼諧，為河南尹，有投牒誤書紙背者，判云云。】	**笑殺**門前著靴漢。
182	崔十孃	遊仙窟詩【案：舊載詩七十八首，猥褻淫靡，幾乎傷雅，今錄稍可采覽者一十九首。】：別文成	嬌鶯**弄殺**人。
183	許渾	寄獻三川守劉公，二首之二	莫教**愁殺**馬相如。
184	許渾	新柳【案：第七句缺一字。】	**愁殺**朝朝暮暮人。

「網路展書讀」内の「新詩改罷自長吟 – 全唐詩檢索系統」を利用して作成。

〈なばた よしのり／本学教授〉